

## 花き (アレカヤシ) に対する

## 被覆りん硝安加里の施肥

鹿児島県経営技術課  
専門技術員

桜井俊武

## 1. 検討地区の概況

指宿市は、1日当たり12万トンにも上る温泉湧出量があり、天の恵みの温泉は農業用にも利用され、泉熱を熱源としたハウスで観葉植物を生産している農家は125戸にもなる。栽培面積は12ha、年間1,246千鉢が生産され、その販売額が6億4千万円にも達していることから、指宿農業改良普及所は、泉熱利用観葉植物団地の育成を、重点普及課題にとりあげて指導中である。

その中心になっているグリーンファームの概要は、昭和51年第二次農業構造改善事業で7.8haの土地造成を行い、温泉熱を熱源としたガラスまたはビニールハウス内で、観葉植物（鉢物園芸）を、8名で栽培している共同事業体である。現在はガラス温室（8棟）、ビニールハウス（32棟）を使用し、アレカヤシ等を中心に、10種類以上の花きを栽培している。

## 2. とりあげた理由（施肥改善上の問題点）

化成、油粕、骨粉等をくみあわせた年数回の施肥体系（勘による施肥で、濃度障害をうける場合がある）の改善を考えて、施肥の省力化を中心に検討した。

## 3. 展示圃の設計

（栽培概要）

- (1) 品種名 アレカヤシ (2) 苗 2年生  
(3) 作式 10号鉢植え 1区当たり10鉢  
(4) 施肥量（1鉢当たり・別表参照）  
(5) 施肥期と方法

基 肥	追 肥
5月30日、土と混和 または置肥	6月26日 11月28日 1月23日

## グリーンファームのハウス内



施 肥 量

区名	肥料	肥 料 名	基 肥	追 肥			成 分 量		
				1 回	2 回	3 回	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O
対 照 区		油 カ ス 骨 粉 化成10-10-10	20 g	20 g	20 g	20 g	8.4 g	18.0 g	3.0 g
			15	15	15	15			
			5	5	5	5			
50 g 区		1 4 0 日タイプ	50	50			13.0	3.0	11.0
展示 A 40 "		"	40	40			10.4	2.4	8.8
" 30 "		"	30	30			7.8	1.8	6.6
100 g 区		2 7 0 日タイプ	100				13.0	3.0	11.0
展示 B 80 "		"	80				10.4	2.4	8.8
60 "		"	60				7.8	1.8	6.6

展示A, 展示Bは被覆磷硝安加里140, 270タイプ

4. 展示圃の調査成績

(1) 生育調査

区名	項目 調査月日	草 た け cm				茎 数				茎直径(鉢上5cmを測定)			
		6月5日	8月7日	10月21日	2月7日	5/6	7/8	21/10	7/2	5/6	7/8	21/10	7/2
対 照 区		51.0	72.3	110.3	125.3	4	4	4.3	4.3	0.9	1.3	1.7	2.0cm
展示 A 50 g		51.3	65.7	107.7	120.3	4	4	5.3	5.7	0.8	1.3	1.5	1.7
	40	45.0	72.3	102.7	126.3	4.7	5.0	5.7	5.7	0.8	1.2	1.6	1.9
展示 B 50 g		59.0	71.0	109.3	132.0	4	4	4.7	5.0	0.8	1.3	1.8	1.8
	40	61.7	81.7	118.3	125.0	4	4.3	5.7	6.0	1.0	1.4	1.6	1.8
30		55.0	73.0	115.0	135.0	4	4	4.0	5.0	0.9	1.4	2.0	1.9
	60	56.3	80.3	121.0	141.6	4	4.3	5.3	5.3	0.9	1.1	1.6	1.8

(2) 考 察

ア. 生育調査成績から、被覆肥料区は茎数の増加に効果がみられた。処理区の中では、展示B(270日タイプ)が生育や品質の面から、対照区に比較して3ヶ月ぐらい早く出荷できた。

イ. 展示B(270日タイプ)の中では100g区が生育がよく、肥料による被害もないので、1鉢(10号鉢)当たりの施肥量は100gが適当である。

ウ. 施肥の方法(置肥、土との混合)について検討したが、置肥すると灌水時に、肥料がとび出ることがあるので、総合的(灌水、臭等)に考えて、土との混合が実際的な方法と考えられる。

エ. 1鉢当たりの肥料代は、対照区に比較してやや高くなるが、出荷までの期間が短縮されたり、施肥の省力化(1鉢当たりの重量12~13kgで、移動の時間が少なく施肥回数が少なくなった。)等、農家の方から、経済効果が高い施肥として、さっそく導入された。

施肥は鉢物の用土との関連から検討する必要があり、とくに用土の使用量も多いので、用土の質、植物への影響、持ち運び上の重量、入手の難易など考慮して、最適のものを検討する必要がある。

8月生れのせい、編集者は真夏の頃  
あ と が き  
が一番調子が良い...と書いたトタン、

8月に入っても一向に夏らしい天気恵まれず、いさゝか閉口致しました。8月半ばに入ってどうやら持ち直しそうな気配ですが、本誌が出る頃まで続くのかどうか、心配です。

訂 正  
7月号掲載・関根喜平先生の“水田転換と麦の集団栽培”のうち、次のように訂正致します。

誤 正

- 8頁左側上から18行 4.3運動の提唱 4.5・3運動の提唱
- 8頁右側上から15行 北浦大潮沼に接して 北浦等の大湖沼に接して
- 7頁「ムギ一大豆体系の経済性」備考  
相原, 三好原園 桐原, 三好原園

5. 今後の検討課題